

雑誌を通じた教員研修

—雑誌『小学校』特別増刊号を中心に—

吉 野 剛 弘*

In-service Training for Teachers through Subscribing Serials

—Focusing on the Extra Issues of Shogakko—

YOSHINO Takehiro*

Abstract

This article focuses on the extra issues of Shogakko. From historical perspectives we investigate desirable in-service training for teachers on its form and its contents.

The extra issues of Shogakko published from 1913 to 1926. Kyoiku-Gakujuttsu-Kenkyukai, the editor, offered the readers in-service training through subscribing the serials, instead of attending official face-to-face lectures held in summer or winter vacations.

The extra issues of Shogakko contained cultural articles as well as those related to daily teaching practices. The editor also offered the readers opportunities for questioning the writers of the articles to keep interactivity between the writers and the readers. As a result, the extra issues gained a reputation from their readers.

キーワード：教員研修、教育雑誌、季節講習、専門性向上、準専門職

Keywords : In-service Training for Teachers, Serials on Education, Seasonal Session, Specialty Improvement, Semiprofession

はじめに

教員のライフステージとして、養成、採用、研修の3つの段階があることは、文部科学省も示す通りである。これらのうち、最も長い期間にわたるのが研修である。

国際的な観点からみたときに、日本は教員の研修が盛んな国でもある。法令に規定されたものから、自主的なものまで、さまざまな研修が存在している¹。その意味で、日本の教員は勉強熱心ということになるのだろう。

一方で、その内容が十分精査されていない側面があることは否めない。何かのために必要だからという理由で研修が増えるのであれば、ひたすら増えつづけるのみである。望ましい研修のあり方、すなわちどのような形態で、どのような内容で行われるべきかが検討されるべきである。

また、上からの要請に基づいて設定される研修が、現場のニーズに当たっていない場合もある。このような場合も、まさに形態と内容に問題があるのであって、そのような齟齬をどのように解消していくかも検討されるべきであろう。

そこで本論文では、その解決の糸口を歴史に求め

* 情報環境学部情報環境学科講師 Lecturer, Department of Information Environment, School of Information Environment

てみたい。具体的には、教育学術研究会が編集し、同文館が発行していた雑誌『小学校』の特別増刊号として発行された『最近思潮 教育夏季（冬季）講習録』（以下、『講習録』）を検討の対象とする。

雑誌『小学校』については、これまでも小熊伸一が検討している²。しかし、通常号の検討にとどまっており、特別増刊号である『講習録』についてはその目次の一部を集成したところにとどまっている。

『講習録』は、大正期に発行されたものだが、教育学術研究会の人脈を駆使して各界の著名人に執筆してもらうとともに、雑誌という特性を生かして読者からの質問を受け付けて回答するなどして双方向性を確保するという特徴を持ち、同時代的に高い評価を受けた。このような雑誌を通して、上述の問題を考えていくことにする。

1. 『講習録』の書誌的検討

(1) 『講習録』の書誌情報

現在確認できる『講習録』は、表1の通りである³。1913（大正2）年夏季から1926（大正15）年夏季まで、27冊が発行された。

後述する発刊の趣旨より、1913（大正2）年夏季が最初であることは確実だが、1926（大正15）年夏季が最後かどうかは判然としない。しかし、1926（大正15）年12月に『最近思潮教育講座』第1輯が発行された。『最近思潮教育講座』は、第2輯まで存在していることが分かっているが、このような新たなシリーズが発行されたことを考えると、『講習録』は1926（大正15）年夏季に発行されたものが最後であると考えてよいだろう。

1913（大正2）年夏季の『講習録』には、以下に示すような発刊の趣旨が述べられている。

凡そ其の従ふところ業務の何たるかを論ぜず、吾人は常に直接其の業務に関して、亦直接業務には関せずとも普通一般に人として、常に修養の功を積み、世の進運に伴ふことを怠るべからず。殊に次代国民の教育に任ずる我教育家に於てその然るを觀る。

我が『小学校』は創刊以来巻を改むること十五、常に此の態度を以て全国大多数の小学教員諸君と交り、今や教育雑誌中最大部数を発行し、教育実業界の明星と仰がるゝに至れるは、本会の大に喜ぶところなり。

顧ふに、我が小学校教員諸君が、与へられたる夏季休暇も之を自己の為に費すこと稀にして、其の業務の為に所謂夏季講習なるものに依りて研鑽を怠らざるは、これ実に我が初等教育界の一大美事と謂はざるべからず。

然りと雖も、従来行はれ来りし夏季講習会が、其の多くは強制的のものにして従つて多くの時間と経費とを要する割合に、其の効果の挙らざるは吾れ人共に浩歎する処なり。本会茲に觀るあり、簡易なる方法の下に極めて自由に何らの抑圧を受くることなくして、切要の学科につき直接講習会に出で、講師の面前に講義を聴くと何ら選ぶところなからしめんとし、爰に本誌を発刊して全国小学校教員諸君の夏季休暇中に於ける修養研鑽の資として提供することゝせり。⁴

休暇中に研鑽するのはよいことではあるが、既存の対面型の講習会は強制的であるために思ったほど効果が上がらないという。それに比して、雑誌を介した講習は、簡易で自由であり、実効性が上がるという論理である。

(2) 『講習録』の内容

『講習録』の執筆者の選定や内容選択の趣旨が示されることはほとんどないが、1913（大正2）年夏季の『講習録』ではそれが示された。長くなるが、以下にその記述を示す。

本講習録は本会初めての試みなりしが、幸に講師各位が本会の此の企てに賛同を与へられ、時恰かも炎暑を加へ、公務多忙の身を以てして、最も熱心に其の担任の科目につきて講述の労を敢てせられ、予定の進行を得て本日読者に提供するを得るに至れるは、謹みて講師各位に深厚なる謝意を捧ぐところなり。

表1 『講習録』の一覧

	発行年	月	日	表題	価格
1	1913 (大正 2)	7	20	大正 2 年度 最近思潮 教育夏季講習録	0.50
2		12	10	大正 2 年度 最近思潮 教育冬季講習録	0.50
3	1914 (大正 3)	7	20	大正 3 年度 最近思潮 教育夏季講習録	0.50
4		12	10	大正 3 年度 最近思潮 教育冬季講習録	0.50
5	1915 (大正 4)	7	20	大正 4 年度 最近思潮 教育夏季講習録	0.50
6		12	15	大正 4 年度 最近思潮 教育冬季講習録	0.50
7	1916 (大正 5)	7	20	大正 5 年度 最近思潮 教育夏季講習録	0.50
8		12	20	大正 5 年度 最近思潮 教育冬季講習録	0.60
9	1917 (大正 6)	7	20	大正 6 年度 最近思潮 教育夏季講習録	0.60
10		12	20	大正 6 年度 最近思潮 教育冬季講習録	0.60
11	1918 (大正 7)	7	20	大正 7 年度 最近思潮 教育夏季講習録	0.60
12		12	15	大正 7 年度 最近思潮 教育冬季講習録	0.75
13	1919 (大正 8)	8	1	大正 8 年度 最近思潮 教育夏季講習録	0.80
14		12	20	大正 8 年度 最近思潮 教育冬季講習録	1.00
15	1920 (大正 9)	7	25	大正 9 年度 最近思潮 教育夏季講習録	1.30
16		12	10	大正 9 年度 最近思潮 教育冬季講習録	1.30
17	1921 (大正 10)	7	25	大正 10 年度 最近思潮 教育夏季講習録	1.30
18		12	20	大正 10 年度 最近思潮 教育冬季講習録	1.30
19	1922 (大正 11)	7	20	大正 11 年度 最近思潮 教育夏季講習録	1.30
20*		12	10	大正 11 年度 最近思潮 教育冬季講習録	1.30
21	1923 (大正 12)	7	20	大正 12 年度 最近思潮 教育夏季講習録	1.30
22		12	20	大正 12 年度 最近思潮 教育冬季講習録	1.50
23	1924 (大正 13)	8	15	大正 13 年度 最近思潮 教育夏季講習録	1.30
24		12	25	大正 13 年度 最近思潮 教育冬季講習録	1.30
25	1925 (大正 14)	7	15	大正 14 年度 最近思潮 教育夏季講習録	1.30
26*				大正 14 年度 最近思潮 教育冬季講習録	1.30
27	1926 (大正 15)	7	15	大正 15 年度 最近思潮 教育夏季講習録	1.30

*は広告により存在が確認できるものの現物が確認できないもの

本講習録に収めたる科目につきては、或は之を付近の読者に問ひ、或は之を中央に於ける当局に諮りて選びたるものにして、いづれも初等教育上切要とせらるゝものなることは蝶々するを要せざるなり。

最近教育思潮は最近世界に於ける教育原理の大思潮につきて乙竹教授の詳細に説述せられたるもの、又教授法近時の傾向は昨年帰朝せられたる棚橋教授の帰朝土産ともいふべく、泰西教授法の新傾向につきて講述せられたるものなり。又国

語と算術とは小学教科中主要なるものゝ一なれば両科につきて国定教科書編纂者としての意見は芳賀博士及び川上文部編修に乞ひ、又此の両科につきて実際方面の研究者としての意見は之を馬淵。マ堀両訓導を煩したり、読者其の心を以て熟読せられんことを請ふ、若し夫れ無線電信電話と航空機とは最新科学を利用せる通信交通機として国民教育に従事するものは其の一般を知悉すべきものなるを信じ、いづれも其の専門研究家に之が講述を乞ひたり、殊に鳥潟技師は春洋丸

船上無線電話の実験をなしつゝこの稿を起され、
栖原工学士亦所沢飛行場に往復しつゝこの稿を
起されたるものなることは読者の予め諒知せら
れんことを乞ふ。社会の改善といひ、自治体の改
良といひ共に我邦刻下の急務にして共に教育家
の奮励に俟たざるへからざるものなり。これ本誌
に通俗教育と自治講話を収めたる所以なり。近來
教育上実利実用といふことのみ重んぜられ動も
すれば趣味に関するものゝ軽んぜられんとする
傾なきにしもあらず。文芸講話とお伽噺の話方と
を収めたる所以は蓋しこゝにありて存す。童話の
教育的価値如何は今更之を論ずるの要なし、之を
話すには如何なる注意を要すべきか、これ教育実
際家の聴かんと欲するところなるべし。
国民教育の事たる寸毫も国家の要求に背馳すべ
からず、而して国家の要求する処は教育法規の上
に明かなり。然かも往々にして不知不識法規の適
用を誤るなきを保せず、これ本誌が山松講師に請
うて法規の適用と管理との講述を収めたる所以
なり。(傍点原文ママ)⁵

教員が学ぶべきことをそれ相応に精選している
ことが分かる。執筆者もそれぞれの分野で活躍する
人物を選んでいる。教育学会研究会の人脈を駆使し
た人選ということができよう⁶。

また、最新科学や趣味的なものも採録すると述べて
いる。要するに教養として知っておくべき内容とい
うことである。最新科学を駆使した通信機器は、
「国民教育に従事するものは其の一般を知悉すべき」
であり、実利実用にばかりとらわれて、「趣味に
関するものゝ軽んぜられんとする傾」はよくない
というのである。単なる教授技術にとどまらず、広
い教養をも持つことを教員に求める編集側の姿勢
がうかがえる。

『講習録』全体をみたときに、どのような内容が
掲載されていたのだろうか。全 27 冊の『講習録』
には全部で 229 件の論文が掲載されたが、その内
容の分類と件数は以下の通りである⁷。

- ①教育学（説）：62 件
- ②教科教育：65 件
- ③社会教育：22 件

- ④倫理学・哲学：10 件
- ⑤心理学（含・医学的なもの）：13 件
- ⑥教養：37 件
- ⑦時局：20 件

これを見る限り、日々の教授に有用な情報が多い
ことが分かる。「社会教育」には、小学校に併設さ
れることの多かった実業補習学校に関するものも
含まれるので、過半数は小学校教育に直接関係する
ものと言ってよい。既存の対面型の講習会のデメ
リットを克服するという発行の目的から考えれば、
そのような情報が多いのは当然のことである。

むしろ、目立つのはそれ以外の内容である。全体
の 2 割弱が教養的なものである。なお、内容につ
いての詳細な検討は、紙幅の関係より他日に期すこ
とにしたい。

2. 『講習録』の応答性

(1) 「講習日録」「質問用紙」の存在

この『講習録』は、単に編集側が一方的に情報を
提供するにとどまらず、読者からの質問を受けるこ
とにしていたことに特徴があった。

『講習録』は、その末尾に「講習日録」と「質問
用紙」というものが付されていた。また、希望者
には「修了證」も発行することになっていた。「講習
日録」は進捗管理のためのもので、何月何日に何
ページから何ページまで読んだということを記録
するためのものである。一方の「質問用紙」は、内
容についての疑問を記す書式であった。

双方とも 1 ページに 10 個の欄があった。1913
(大正 2) 年夏季の『講習録』には双方ともに 4 ペ
ージずつ配当されていたが、1914 (大正 3) 年冬季
のものから 2 ページずつに減った。最大 40 個ないし
20 個の記録ないし質問を記入できたということに
なる。

しかし、「講習日録」と「質問用紙」は、1921 (大
正 10) 年夏季の『講習録』から掲載されなくなり、
「修了證」も同時に発行されなくなった。「質問用紙」
と「修了證」の廃止の理由として、「こんどから付録
の質問用紙を省きました。これは何も皆さまの質問
を受けないと云ふ訳ではありません。御疑問の節は

これまで同様御遠慮なく著者なり本会なりへ御申越下さい。尚御希望の向に差上げておました講習修了證もよすことにいたしました。もう今日はそんな時代でもあるまひと思ひますから。」⁸と記されている。

廃止後の質問数の変化は不明だが、「質問用紙」を廃止すれば、たとえ質問を受けるということになっていても、実際のところ質問をしづらくなっただろう。双方向性の維持はそう簡単なことではなかったのである。

(2)「質問用紙」への対応

1919（大正 9）年までは「質問用紙」が付いていたわけだが、実際に質問は来ていたようである。表 2 は、『小学校』の通常号に掲載された読者からの質問に対する執筆者の回答である。

このような回答が掲載されるのは初期にとどまっており、編集側の対応が尻すぼみであることは否めない。事実、1913（大正 2）年冬季の『講習録』についての質問への回答をまとめた記事では、「つぎつぎに掲載すれど重要ならざるものは省略することとせり（記者）」⁹とも述べており、編集側に疲労困憊の様子すらうかがえる。

一方で、掲載された回答は、かなり高度な内容にまで踏み込む場合もあった。最も高度な内容を含むものとして、第 16 巻第 4 号に掲載された鳥潟右一の回答がある。「波長公式の証明を乞ふ」との質問に対して、微分積分を用いて説明している¹⁰。しかし、師範学校の教育課程に微分積分は含まれていない。読者が理解できるかできないかはひとまず置くとして、執筆者はその程度に高い教養を持つ人物だったのであり、また読者にそのような高みを見せ

る機会があってもよいという編集側の強気な姿勢を見て取ることができる¹¹。

3. 読者からみた『講習録』と講習会

(1)「読者倶楽部」にみる『講習録』への反応

第 14 巻第 3 号から第 16 巻第 11 号にかけて、『小学校』には「読者倶楽部」という欄が設けられた¹²。「▲用紙ハガキ又は同大の紙▲二十字十行以内▲教育上と限らぬ質問をせらるゝも任意。▲匿名にてもし。▲表面に「小学校読者倶楽部原稿」と明記のこと。▲締切毎月一日十五日」¹³という規定のもと、読者より意見や質問を受け付けたのだが、そこに『講習録』に関する投稿もあった。ただし、最後の「読者倶楽部」となる第 16 巻第 11 号は、1914（大正 3）年 3 月の発行であり、『講習録』への読者の反応をみることができるのは、1913（大正 2）年のものとどまる。

『講習録』についての最初の投稿は、第 15 巻第 10 号に掲載された 2 編である。

今回は通信教授の方法を夏季講習に応用せられて夏季講習録の御発行、吾々避地に在る者は御蔭にて有益なる講習を用意に御受け候事只只感謝の外無之候 今後とても臨時号にはかゝる種ものを御企て下さるやう奉懇願候（埼玉 K 生）¹⁴

夏期講習録正に到着仕候。実物を手にして、大なる書物にてありながら価格の低廉なると、実益の大なるものたるを信じ申候。爾今、続々此の種の発刊あらんことを希望に不堪候。謹んで感謝す。（愛知 眞清水）¹⁵

表 2 『小学校』通常号に掲載された質問への回答

巻	号	発行年	月	日	執筆者	表題
16	2	1913（大正 2）	10	15	堀七藏	最近思潮教育夏期講習録の質問に答ふ
	3		11	1	鳥潟右一	教育夏期講習録の質問に答ふ
	4		11	15	鳥潟右一	教育夏期講習録の質問に答ふ
	11	1914（大正 3）	3	1		教育冬季講習録質問解答
18	2		10	15	入澤宗壽	大正三年教育夏季講習録の質問に答ふ
	5		11	15	上野陽一	大正三年教育夏季講習録の質疑に答ふ
20	1	1915（大正 4）	10	1	横山榮次	大正四年教育夏季講習録の質問に答ふ
	2		10	15	平馬左橘	大正四年教育夏季講習録の質問に答ふ

前者の投稿では地域を選ぶことなく有益な内容の享受できることへの謝意が、後者の投稿では廉価で情報が入手できることへの謝意が示されている。

後者の投稿に関わって、次号では以下のような投稿もあった。

七月発刊の小学校誌上に、八月講習録を増刊するとの予告有之候へ共、発刊の日を期待致居候。図らずも七月廿九日該講習録を手にしにせり。然るに予想よりも実に驚き入り候。其の定価に比し頁数の多き事、又体裁として立派なること、内容上は講師諸先生の御熱心なる講演、愚輩等の最も良師録に有之候。目下熱心に講習中に有之候。次に本誌の体裁として申上度事は、保存上の必要から表紙の如きはクロース表に望たき事に候。余は全部講習終りたる上御差支なくは兼ねて申上度候。(北海道 瀬川生)¹⁶

保存のために装丁をよくしてほしいということは、読み返すに値する内容を盛り込んでいたことを意味している。読み返しが可能というのは紙媒体の特徴であり、その点において対面型の講習会よりも有意義であるということでもある。

また、内容についての感想も見られる。

今回御発行の「夏期講習録」多大の興味を以て読了致候。今後、之により得たところを以て、直接間接に児童教養上効果あらしめ、貴会の労に酬ゆる考に有之候。一言を述べて謝意を表し候。(東京 伊藤生)¹⁷

ここで注目したいのは、「間接」という文言である。日々の教授に直接役に立つことばかりが重要ではなく、ある内容が間接的に役に立つということもあることが、読者にも一定の理解を得られていたということである。

(2) 講習のあり方についての読者の意見

雑誌を介した講習として発行された『講習録』が一定の評価を受けたのは、既存の対面型の講習会に何らかの問題を感じているからでもある。では、既存の講習会に対する読者の考えはどのようなもの

だったのだろうか。

現職の教員からの投稿では、以下のように述べられている。

知識補充の一法として講習会の開催がある、所が講習会へ出席するといふ事が多くの人にとつて厭である、詮なく、義務的に重苦しく感ぜられる特に夏期の講習が＝毎日五時間立ちん坊で躍つたり唱つたりして心身労れた吾を自由に打ちくつろいで静養せようと言ふ時だから乗り気のせぬのも厭うのも一面には世態人情の自然でもあるがまた半面には現行の講習開催には諸種の欠陥弊贅もあつて、これらの気分を増長させる原因もある、

(中略)

講習科目にしても教育者専門の小学校教科目に限られて頗る狭少な範囲のものである。教育者たると同時に人としての修養に資するものが無い、正しき社会観や人生観を作り、情趣的生活の方面も考えられて居ない。選定法にも去年何かを講習したから今年はこれにせよといったやうで慎重を欠いた所が多い様に思はれる、

(中略)

それに講習会といへば修身教授法、唱歌教授法、国語科教授法、心理学といつも定まつて居る、時代の風潮や哲学的方面がむしろ必要であるに、それが等閑にせられて居る。世間知らず常識に欠けて居るとの評が教員によく与へらるゝも無理からぬ事だ。今日の芸術がどうやら、文学の特色がどうやら、新しい文章は如何なるものやら、現代人の欠陥特色がどうやら分らぬものは吾々小学教師である。これが生きた修養、知識の補充ではあるまいか。一例をあげると綴方教授法は知つて居るが高等科の上級生などが雑誌などを見つけて新しい文章の気分で書いたものを十年も廿年も昔の古い文章に添削して居りはすまいか。¹⁸

教員研修として一般に想像されるものだけでは不十分だという。最新の情報や教養高いものが求められ、それが結果として日々の教授にも生きるのだという論理である。その意味で、教養的なものも掲載するという『講習録』の方向性と軌を一にしてい

る。単なる教授技術にとどまらず、広い教養をも持つことを教員に求める編集側の姿勢は、読者にも一定の支持を得られていたことが示唆されるのである。

校長レベルからも既存の講習会への批判的な意見がみられた。

我等を驚かすものはいつも郡県主催の夏季講習会出席督励の叫びある。

予はかゝる時常に考へる、『この一卷の夏季講習録と彼の十数日の講習会と、果して何れに絶大な効果があるで有らう』と。時間と経済と気兼気苦労と、夫れ等に伴ふ種々の弊害とを打算して見たならば、如かず！予は一卷の講習録を懐いて、山紫水明の地に踏晦せんには……と絶叫せざるを得ぬ。然り！少くも従来 of 所謂夏季講習会なるものに対しては、失礼ながら予は断然としてかく叫ばねばならぬと思ふ。

(中略)

一卷の講習録を手にする度に、『堂々たる夏季講習会の効果如何』と再思していつもいつもその改正の念を思はぬ事はない。

(中略)

一卷の講習録でも事足り、一部参考書でも満足せらるべき研究の道は有る、然るに堂々講習会を開くといふ以上は、予は少くも前に述べた丈の準備と処理とを必要とする。¹⁹

対面型の講習会はそれに値する内容が提供されているわけでもなく、雑誌や書籍のような媒体を通じた学習によっても有効な研鑽を積むことは可能だというのである。

むすびにかえて

『講習録』は、質問用紙に代表されるような双方向性を確保することで、雑誌というメディアの持つ限界を克服しようと試みた。対面型の講習会だけがすべてではないということを、身をもって示したことができる。

また、その内容についても、日々の教授に直接関係するものにとどまらない広がりを持っていた。教

員研修の内容として一般的に想定される内容のほかに、教養的な内容も掲載した。この方針自体は編集側が当初から定めたものだったが、それが結果的に読者の支持を得ることにもなった。さらには、既存の対面型の講習会との差別化にもつながった。

このことは、現代の教員研修を考える上で示唆に富む。雑誌や書籍以外のさまざまなメディアが存在する中、その内容に見合った方法を模索することは、『講習録』が発行されていた大正期より容易であろう。

ただし、メディアが多様で、双方向性の確立も容易であるがために、かえって困難を抱える可能性も考慮しなくてはならない。また、紙媒体での学びはそれ相応の忍耐力を要することも事実であり、『講習録』が好評を博したのは、それ以外のメディアに乏しかったこと、読者に一定のモチベーションがあったことには注意する必要があるだろう。

研修といえば、日々の実践に直接役に立つことを学ぶことが想定されるわけだが、読者が求めているのは、必ずしもそのようなものばかりではなかった。幅広い教養に根差した教育実践という考え方が存在したのである。ただし、そのような幅広い教養を授けるのが、養成段階であるべきか、研修段階であるべきかということは議論の余地がある。

このような高い評価を受けた『講習録』であるが、その内容の詳細な検討が必要である。実用的なものにとどまらず、教養的なものをも取り込む姿勢は、読者から一定の評価を受けてはいるが、あくまで最終的に日々の教育実践に生きるという面から評価されている。単なる教養主義とは異なるということである。掲載された記事内容の詳細な検討は、今後の課題である。

『講習録』を編集していた教育学会研究会は、対面型の講習会を実施したこともある。1921（大正10）年3月に京都で開催されたもので、「現代思想と教育の展開」というテーマで開催したのだが、『講習録』を出す中で対面型の講習会を実施していたことは興味深い²⁰。『講習録』という雑誌を通じた研修と、対面型の講習会という研修との比較検討も、今後の課題としたい。

注

- 1 「教員研修の実施体系」(文部科学省ウェブページ内)によれば、初任者研修と10年目研修の2つの法定研修の他に、17の研修が記載されている。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenshu/1244827.htm
- 2 小熊による『小学校』に関する論考は以下の通りである。
 - ・「解題」『教育関係雑誌目次集成』第Ⅱ期第20巻(1989)
 - ・「同文館と雑誌『小学校』」『立教大学教育学科研究年報』第33号(1989)
 - ・「解説」『小学校』復刻版別巻(大空社, 1995)
- 3 「広告により存在が確認できるものの現物が確認できないもの」については、広告に掲載されている範囲で情報を記載してある。また、1923(大正12)年の冬季の『講習録』の価格が高いのは、関東大震災による社屋の損壊が関わっているものと思われるが、推測の域は出ない。
- 4 『講習録』(大正2年夏季), 巻頭頁数なし
- 5 『講習録』(大正2年夏季), 巻頭頁数なし
- 6 教育学術研究会の設立経緯は、注2の小熊の論考に詳しい。『講習録』が発行された時期の同会の動向は明らかではないが、『小学校』の通常号の執筆者の陣容を勘案しても、それ相応の人脈を持っていたものと推察される。
- 7 現物の所在が確認できないものについては、広告に掲載されているものによった。なお、現物と広告の双方が確認されているものを照合した結果、題目の一部に違いがあるのみである。
- 8 『講習録』(大正10年夏季), p.406
- 9 「教育冬季講習録質問解答」『小学校』第16巻第11号(1914.3.1), p.54
- 10 鳥潟右一「教育夏期講習録の質問に答ふ」『小学校』第16巻第4号(1913.11.15), p.69
- 11 ただし、『小学校』誌上には、中等教員検定試験である文検(文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験)の試験問題や受験体験談も掲載されており、読者の中には微分積分を用いた回答を理解できる者もいたと思われる。小学校教員が中等教員検定試験を受験することは、キャリアアップであると同時に自己研鑽とも捉えられるが、この点については稿を改めて論じることしたい。
- 12 第14巻、第15巻の時期はほとんど毎号に設けられたが、第16巻では第1号、第3号、第11号のみに設けられた。
- 13 『小学校』第14巻第3号(1912.11.5), p.49
- 14 『小学校』第15巻第10号(1913.8.15), p.51
- 15 同前
- 16 『小学校』第15巻第11号(1913.9.1), p.45
- 17 『小学校』第16巻第1号(1913.10.1), p.53
- 18 山口 武永生「夏期講習会の革新」『小学校』第17巻第8号(1914.7.15), pp.40-42
- 19 福島県双葉郡請戸小学校長 作山美八「夏期講習会改良意見」『小学校』第23巻第8号(1917.7.15), pp.52-55
- 20 この講習会の内容は、同年に同文館より『現代思潮と教育の新傾向』として刊行されており、文字メディアを通じた研修という姿勢が失われているわけではない。

(付記) 本論文は、平成29年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「近代日本準専門職形成史の研究：キャリアコース・試験情報・専門性向上言説を中心に」(研究代表者：菅原亮芳、課題番号：16H03767)による研究成果の一つである。